九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Study on the Modernization of Korean Traditional Music in NANTA

李, 敬美
九州大学大学院芸術工学府

https://doi.org/10.15017/19759

出版情報：九州大学, 2010, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第 2 部　ナンタに見る韓国伝統音楽の現代化

第3章 プンムルからサムルノリへ、そしてナンタへ

3.1 プンムル，サムルノリ，ナンタの概要

本研究では現在の国楽の現状を踏まえ，国楽の中でも特に韓国伝統打楽器を中心としたプンムル，サムルノリ，ナンタを取りあげる。民俗楽に分類されるプンムル[43]は音楽を含む総合的な韓国伝統芸能である（図 3-1）。このプンムルの音楽部分をもとに，打楽器アンサンブルによる音楽作品として構成されたものがサムルノリである。ナンタはサムルノリのリズムが重要な役割を担う音楽劇であるので，ナンタは間接的にプンムルを継承していることになる。

韓国伝統楽器が主になるプンムルは，野外で大勢の人によって行われ，音楽，踊り，演劇が同時に楽しめる総合芸術的な形態である。上演時間は数時間から数日にわたるものまで様々だが，30 人程度で，野外の広場などで村の行事として行われる。

そのプンムルを，室内で少ない人数でも上演できるように再構成したものがサムルノリである。最小限 4 人で上演することができる。サムルノリの演奏会は，10 分程度の曲を数曲，全体で 90 分程度である。

ナンタは，厨房器具と韓国伝統楽器を用いての上演が特徴であり，踊り，歌，軽業，演劇が含まれる。ナンタ公演は 5 人のパフォーマーによって，約 90 分専用劇場で行われる。

プンムル，サムルノリ，ナンタの 3 つの差異をあらかじめ表３にしめしておく（表 3）。

---

[43] プンムルは地域と行事の内容によって，クッ(굿)，メグ(매구)，メググッ(매구굿)，プンジャン(풍장)，ドゥレ(두레)，コルリプ(乞粒 걸립)，コルグン(걸궁)，ノンアク(農楽 농악)など異なった名称で呼ばれて来た。現在はプンムルかプンムルクッと呼ばれる事が多い。本論文ではプンムルと呼ぶ。 ボンチョンノリマダン『民俗教育資料集』ウリ教育，1994，pp. 12［原書名：봉천놀이마당『민족교육자료집』우리교육，1994，pp. 12］

図 3-1 プンムルは踊，歌，軽業，演劇が含まれている総合的芸能で野外の広場で行われる。（李敬美撮影 2010 年 8 月）

表 3　プンムル，サムルノリ，ナンタの差異

	プンムル	サムルノリ	ナンタ
機会	行事	演奏会	公演
場	野外	演奏会場	専用劇場
時間	数時間～数日	約 90 分 (数曲からなるプログラム)	約 90 分
参加人数	30 人程度（増減可能）	4 人（増員可能）	5 人
使用楽器	韓国伝統楽器のみ	韓国伝統楽器のみ	厨房器具，韓国伝統楽器
衣装	伝統衣装	伝統衣装	現代衣装，伝統衣装
構成要素	楽器演奏，踊り，歌，軽業，演劇	楽器演奏，歌	楽器演奏，踊り，歌，軽業，　演劇，
音楽構成要素	楽器演奏 （韓国伝統チャンダン）	楽器演奏 (韓国伝統チャンダン)	楽器演奏 （韓国伝統チャンダン） 事前に録音された BGM
観客参加	あり	なし	あり（俳優の誘導）
照明	なし	なし	あり

3.2 行事としてのプンムル

音楽としてのプンムルは民俗楽[44]に分類されている。プンムルには楽器演奏・演劇・踊りが含まれ，楽器の担当者はアプチベ（앞치배），演劇・踊りの担当者はドィッチベ(뒷치배)と呼ばれている。プンムルはケンガリ（꽹과리）[45]，チン(징)[46]，チャング(장구)[47]，プク(북)[48]，ソゴ(소고)[49]などの韓国伝統打楽器を中心に用いて広場，町の通りや田畑の中などの野外で踊りや軽業的な所作を伴って演奏される。地域によってはプンムルの開始の時や盛り上がる時にラッパやテピョンソ（태평소）[50]が加わる場合もある。

図 3-2　ソゴ（李敬美撮影 2010 年 8 月）

[44] 韓国では伝統音楽を国楽と称している（最近ではそれに代わる用語が提案されているが)。そして,その国楽の世界を大きく「正楽」と「民俗楽」に二分する習慣が広く行われている（これに 20 世紀後半以降に現れた「創作国楽」を加えることもある）

[45] ケンガリは真鍮で作った打楽器で丸くて平たい。直径 20cm 以内で銅鑼より少し小さい。両手に楽器とばちを持って叩く。

[46] チンは真鍮で作った丸くて平たい打楽器で直径 21~48cm とケンガリより大きくデグム（大金）とも呼ばれる。紐をかけて片手で持ち,何重の布を巻いたばちで叩く。

[47] チャングは砂時計を横に置いたように真ん中がくびれた打楽器で,両側面に張った革を手とばちで叩く。

[48] プックは平たい円柱形の打楽器である。円柱の丸い側面を台につけ,平たい面をばちで叩く。

[49] ソゴは小さい太鼓を意味する。直径 20cm,幅４～５cm ほどで,桶に取ってがついている。片手で取っ手をつかみ,ばちでたたく。

[50] テピョンソは韓国のダブルリードの楽器。別名スゥエナム（哨吶 쇠납）,ホチョック（胡笛 호적）,ナルラリ（날나리）とも呼ばれている。管の上端は真鍮や銅などの金属で覆い,その先に葦で作ったリードをつける。指穴のある部分は木製で,木管の先はラッパのような形の金属を固定して拡声効果を大きくしている。指穴は全部で８個。上側に７個,下側に１個。約２オクターブの音域を出すことが出来る。

図 3-3　テピョンソ（李敬美撮影）

プンムルは地域の安寧や豊穣，豊作を祈るために行われる伝統的な地域行事である。プンムルという語には二重の意味があり，行事全体を指す場合にも，行事の中で行われる部分的な音楽・芸能を指す場合にも用いられる。行事としてのプンムルの全体像を例示した（図 3-4）でいえば，この図に示された全体も，そしてA，B，C，Dで示されている各部分もプンムルと呼ばれるということである。A，B，C，Dの各部分では楽器演奏，歌，踊りなどを伴う儀式が行われる。またそれぞれの儀式と儀式の間には，場所の移動や飲酒・歌・踊りなどの祝い事が行われるが，このような移動や祝い事も行事全体としてのプンムルを構成する要素である。

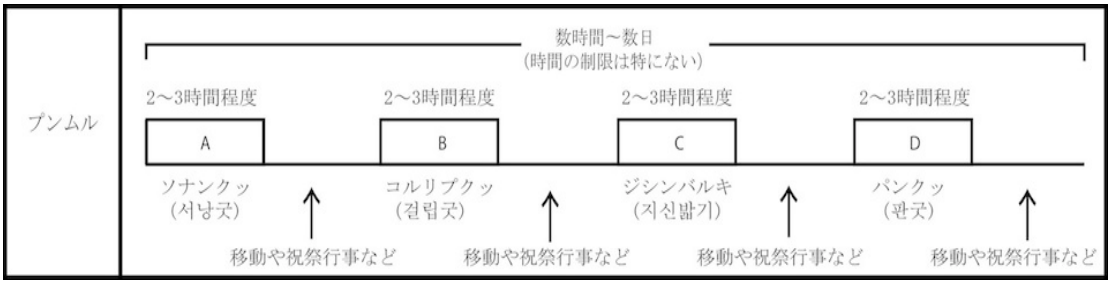

図 3-4　プンムルの時間推移

韓国では旧暦の正月の 15 日頃に新年を祝うためにプンムルを催すことが多い。図 3-4 は韓国のカンウォンド（江原道 강원도）のカンルン(江陵 강릉)市で行われる新年のプンムルの例である[51]。このカンルン・プンムルは 1985 年に重要無形文化財に登録され，現在も正月の祝いや祭りの際に催されている。カンルン・プンムルを行う時には 15 日の前夜から町の人々は村を守ってくれるソナンシン(城隍神 서낭신)が宿る神木の前に酒・果物などを供え，神様に対する感謝と村の安寧を祈る「ソナンクッ」(城隍クッ 서낭굿)と呼ばれる儀式を行う（図 3-5）。15 日からは村やその地域の共同体運営のための資金集めるための「コルリプクッ」（乞粒クッ 걸립굿）（図 3-6）と，民家を訪ねて厄払いと幸福を祈る「ジシンバルキ」（地神バルキ 지신밟기）が行われる。コルリプクッ，ジシンバルキが全部終わった後には楽器演奏や軽業などが中心の芸能である「パンクッ」(판굿)が行われる。

図 3-5　村を守ってくれるソナンシン(城隍神)が宿る神木の前に酒・果物などを供え，神様に対する感謝と村の安寧を祈る「ソナンクッ」を行っている様子。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp. 221）

[51] ジョン・ビョンホ（鄭昞浩）『農楽』 悅話堂，1986 ，pp. 160～170［原書名：鄭昞浩］『農楽』열화당，1986，pp. 160～170］，ボンチョンノリマダン『民俗教育資料集』ウリ教育，1994，pp. 41-77［原書名：봉천놀이마당『민속교육자료집』우리교육，1994，pp. 41-77］

図 3-6　橋の上で「コルリプクッ」（乞粒クッ）を行っている。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.128）

行事としてのプンムルは以下の４つ形態に分類される。(1)雨が降るように祈るための祈雨祭や秋の収穫を祝うため（図 3-7）の感謝祭に行われる「祝願」形態（図 3-8），(2)農業の中での労作の能率を高めるために行われる「労作」形態（図 3-9，図 3-10），(3)村の共同資金調達などの目的のために行われ，家の厄払いや村の安寧への祈りに対して米や金銭を受け取る「乞粒」形態（図 3-11，図 3-12），(4)優れた専門芸能人の芸を楽しむために行われる「芸能」形態である（図 3-13，図 3-14）。

図 3-7　1970 年代に行われた「祝願」形態のプンムル：豊作になるよう牛に対して祝願している。1970 年代の慶尚北道醴泉。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.193）

図 3-8　1970 年代に行われた「祝願」形態のプンムル：全羅北道の裡里市のプンムルで神木に対して豊作やなどを祝願している。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.221）

図 3-9　1970 年代に行われた「労作」形態のプンムル：全羅北道の金堤市で労作の能率を高めるためにプンムルが行われている。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.211）

図 3-10　1970 年代に行われた「労作」形態のプンムル：慶尚北道の金陵市の田んぼで労作の能率を高めるために行われている。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.25）

図 3-11　1970 年代に行われた「乞粒」形態のプンムル：全羅道の金堤市で行われている「乞粒」形態のプンムルで厄払いをするため民家に移動中。（鄭昞浩『農楽』，悅話堂，1986，pp.153）

図 3-12　1970 年代に行われた「乞粒」形態のプンムル：カンルン市（江陵市）のある民家で厄払いを行っている。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.165）

図 3-13　韓国の昔の風景を再現している野外博物館韓国民俗村では毎日 2 回「芸能」形態のプンムルを披露している。龍仁市に所在している韓國民俗村。（李敬美撮影　2008 年 1 月）

図 3-14　地域の行事やお祭りで披露する「芸能」形態のプンムル。（李敬美撮影 2010 年 8 月）

祭礼的な性格が強い行事としてのプンムルの所要時間はその種類にもよるが，短くて３時間，長い場合だと数日に及ぶ場合もある。

プンムルは地域，時期によって内容や構成も異なる。例えば秋には農村のプンムルは豊作を願って田んぼ（図 3-15）や農産物を保存しておく甕置き場などで祝願する（図 3-15）。海村では海に対する感謝祭（図 3-17）や船で祝願するなど地域の目的によって異なる内容のプンムルが行われる（図 3-18）。

図 3-15　慶尚北道の金陵市の田んぼで行われているプンムル。（鄭昞浩『農楽』 悅話堂，1986，pp. 119）

図 3-16　農作物を保存している甕置き場で行われているプンムル。全羅南道靈光市（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.229）

図 3-17　海に対する感謝の意味で行われる海村のプンムル。全羅南道莞島郡。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.110）

図 3-18　船の上で行われている海村のプンムル。江原道江陵市。（鄭昞浩『農楽』悅話堂，1986，pp.114）

3.3 ナムサダンによる芸能「プンムル」の継承

プンムルを含む民俗楽は一般民衆の非専門家によって発生したものが多かったが，李氏朝鮮時代には専門の演奏家によってさらに発展した。例えば，ナムサダン（男寺党 남사당）[52]はプンムルを専門的に演奏してきた韓国流浪芸人集団である。彼ら韓国全土を放浪しながら農村での行事の際に呼ばれ，プンムルによってその行事を盛り上げる役割を果たしてきた。男寺党が継承して来た芸能は「ナムサダンノリ」として 1964 年に重要無形文化財に指定され，現在も保存・継承されている。

ナムサダンのレパートリーである「ナムサダンノリ」にはプンムル（図 3-1）以外にも５つの芸能があり，お皿回しであるボナ（버나）（図 3-19），身体体操のような技芸のサルパン（살판）（図 3-20），綱渡りのオルム（어름）（図 3-21），仮面劇のトッペギ（덧뵈기）（図 3-22），人形劇のドルミ（덜미）（図 3-23）がその芸能である。この６つの芸能が全部披露される時は６時間～７時間ぐら

[52]男寺党は数十人のグループで，朝鮮半島各地を旅した。立ち寄った村で，男寺党ノリと総称される農楽や仮面劇，人形劇，曲芸などを披露し，村の発展と人々の健康を祈願し，喜捨を集めて生活をした。名目は寺院の建立や補修の為の歓進であり，寺を中心に活動した為この名称がある。1964 年に重要無形文化財第 3 号に指定され，2009 年ユネスコ無形文化遺産に登録された。

いかかるが，プンムルと他の 2〜3 種類の芸能だけを披露する場合もある。男寺党ノリの 6 つの芸能の中で最も広く普及されたのがプンムルで，民間でも多く演奏されて来た。1978 年にはナムサダン出身のキム・ドクスを中心して野外における行事の際に上演されたプンムルを室内の演奏会で上演することができるようにサムルノリが創始された。

図 3-19 男寺党ノリの芸能の一つであるボナは革で作られたお皿のような円形のものを回しながら技を披露する。（李敬美撮影 2010 年 8 月 15 日）

図 3-20 男寺党ノリの芸能の一つであるサルパン。（ビデオからキャプチャ http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?RL=00184　2010 年 8 月 31 日）

図 3-21　男寺党ノリの芸能のひとつであるオルムは綱渡りで楽器の伴奏に合わせてジャンプなどの技を披露する。（李敬美撮影 2007 年 1 月）

図 3-22　男寺党ノリの芸能の一つである仮面劇のトッペギ（ビデオからキャプチャ http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?RL=00184　2010 年 8 月 31 日）

図 3-23　男寺党ノリの芸能のドルミは人形を動かして披露する人形劇である。（ビデオからキャプチャ　http://www.unesco.org/culture/ich/index.php?RL=00184　2010 年 8 月 31 日）

◇『여기에도　내　혼이　들어있지요』인형　박첨지와　꼭두각시를　들어　보이는　朴季順여사。

図 3-24 ナムサダンのメンバーの一人であるパク・ケスン（朴季順　박계순）がドルミで使用する人形を持ち，「ここにも私の魂があります」と言いながら笑っている。（毎日経済　1982 年 8 月 14 年）

3.4 プンムルの現代化「サムルノリ」

サムルノリはその最初の公演直後からまたたく間に韓国全土に広まり，海外での公演も活発に行われるようになった。1978 年の創始時には固有名詞だった「サムルノリ」という語は，1982 年アメリカのテキサスで行われた打楽器芸術協会国際大会[53]が終わり，世界百科辞典などに登場するようになってからは普通名詞として扱われるようになった。1989 年から行われている世界サムルノリ大会[54]の毎回の参加者は約 1000 人に至っている。2000 年には芸術家派遣プログラム[55]に加えられ，現在サムルノリは，韓国の小・中・高校では伝統音楽授業の教材として中核的な役割を果たしている。

1978 年サムルノリの登場から韓国伝統打楽器を用いた上演活動が活発に行われた。プンムルという総合的芸術から発生したサムルノリはその元になるプンムルよりも広く普及している。そしてプンムルとサムルノリの要素を用いて演劇と融合させたナンタの制作に至る。民俗学者のクォン・オソン（權五聖）はサムルノリの登場について以下のように述べている[56]。

> マスコミで国楽の大衆化を言い出す以前，自然に大衆化したのが 1970 年代後半に出たサムルノリである。サムルノリは大衆化という標榜してないが，大衆に広がってきた。そして，労働現場や大学生のなかでプンムル（農楽）よりも知られている。これは論議があってそうなったことではなく，伝統的な様式を崩さず大衆化になった代表的な例だと言える。(李敬美　訳)

---

[53] 打楽器芸術協会国際大会は 1971 年にパーカッションの日の公演として開始され,毎年行われている。サムルノリは 1982 年に参加した。現在は PASIC(Percussive Arts Society International Convention)として行われている(http://www.pas.org アクセス日：2010.08.31)。

[54] 世界サムルノリ大会は 1989 年から韓国でほぼ毎年行われているサムルノリ大会であり,国内・海外から 100 チーム程が参加し,参加人数はおよそ 1000 人に及ぶ最大規模のサムルノリ大会である。1994 年から最高賞として大統領賞が設けられるようになった。

[55] 韓国文化観光部の主催で 2000 年から行われている国楽講師派遣制度。現在は国楽の外にも演劇,舞踊,映画,漫画,アニメーションなどの芸術分野に対象を広げ,専門芸術人講師を派遣している。専門芸術人講師は全国の小,中,高校において芸術の理論と実技授業を行っている。

[56] クォン・オソン（權五聖）「国楽の大衆化の妥当性と方法論について」1992.4 月に行われた対談記録　［オンライン］http://www.kcaf.or.kr/zine/artspaper92_05/19920502.htm 2010.8.31 取得。

サムルノリという名称自体は民俗楽者シム・ウソン（沈雨晟，1934～）が考案したものであり，４つの打楽器で演奏されるプンムルという意味である。４つの楽器はプンムルで使われる楽器の中でケンガリ，チン，チャング，プクである。サムルノリにおける各楽器の役割は，プンムルノリからの伝統を引き継いだものでケンガリは曲を先導し，チャングはリズムを刻んで行き，ブクはリズムの柱を叩き，チンは全体のリズムをまとめる。

ケンガリ（図 3-25）は丸くて平たい金属製で直径 20cm 以内の体鳴楽器で雷を象徴する。演奏者は両手に楽器とばちを持って叩き，楽器の内壁にふれた指で金属の音を調節しながら，外壁を叩いてリズムを刻む。４つの楽器編成の中では，指揮の役割を果たす。複数で使う時は音の高さが違うケンガリを使用することが多い。別名ではソィとも呼ばれる。

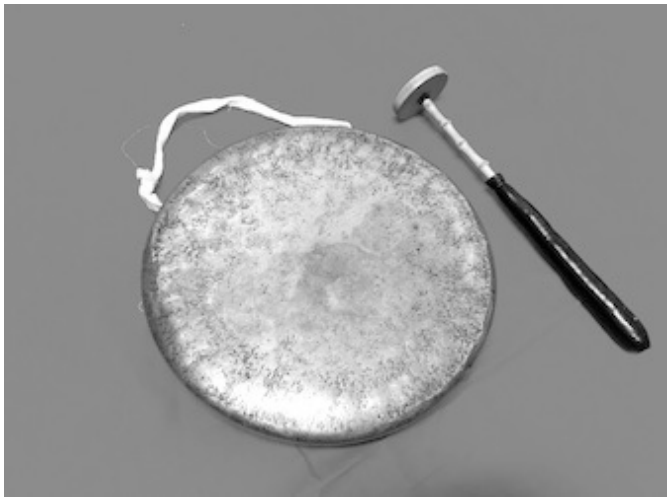

図 3-25　ケンガリ（李敬美撮影　2010 年 8 月）

チン（図 3-26）もケンガリのように金属製楽器であるが直径 21～48cm とケンガリより大きく，風の音を象徴する。チンを片手に持ち，バチで叩くかチン台に掛けてぶら下げたまま叩く。主にはリズムの頭や強拍で叩き，宮廷音楽で使用される時にはデグム（大金）と呼ばれる。

図 3-26　チン（李敬美撮影　2010 年 8 月）

チャング（図 3-27）は，共鳴胴をもつ皮の膜鳴打楽器である。韓国伝統音楽の宮廷音楽から民俗楽まで幅広く使われ，雨の音を象徴する。砂時計を横に置いたように真ん中がくびれた共鳴部の両端に張られた膜を叩く。チャングは両側の異なるばちで叩き，高い音が鳴る側の膜を叩く。バチはヨルチェ，低い音が鳴る側の膜を叩くバチはクンチェと言うが，曲によっては手で叩く場合もある。

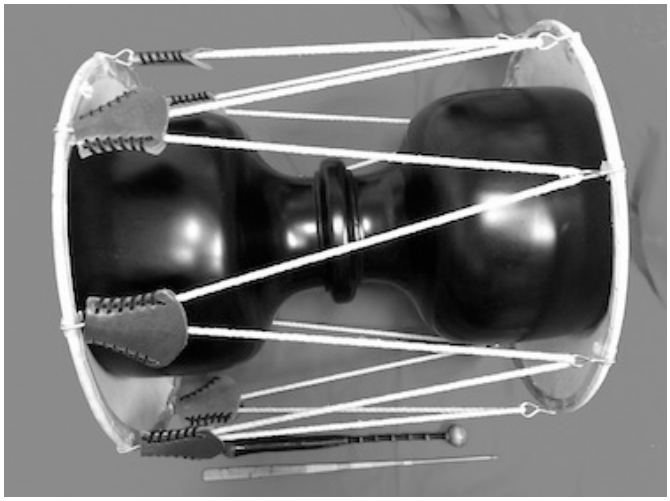

図 3-27　チャング（李敬美撮影　2010 年 8 月）

ブク（図 3-28）も，チャングのように共鳴胴をもった膜鳴楽器で，雲を象徴する。円柱の丸い側面を台につけ，平たい面をばちで叩く。伝統的な演奏法では片手で叩くが，最近は両方の手で叩けるよう改良され，両手で演奏される場合も多い。

図 3-28　ブク（李敬美撮影　2010 年 8 月）

サムルノリはプンムルを近代的な公開演奏会システムへ適合させたものである。そのことによってプンムルの上演は屋内での演奏，限定された数の演奏者での演奏，通常のコンサートの時間設定での演奏，儀式・礼拝・行進・踊りの要素などを排した音楽だけの演奏を可能にした（図 3-29）。

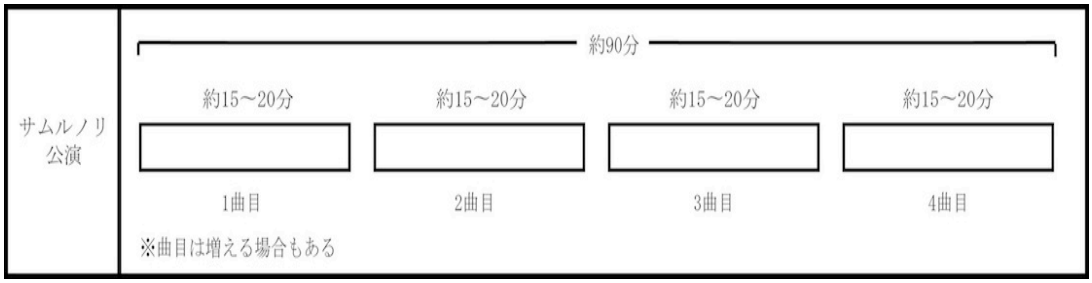

図 3-29 サムルノリの１回の演奏会の時間推移の例

演奏形態と音楽的な面でこのように現代化が行われているにもかかわらず，サムルノリは古くから継承されている伝統音楽であると誤解されることがある。そのような誤解が起こる原因は，プンムルに使われる伝統楽器・伝統衣装[57]がほぼそのまま用いられるという外見的なものだけではなく，伝統音楽の本質を損なうことなく現代化することに成功したサムルノリの音楽自体に内在する。それゆえに，創造的観点からはサムルノリはプンムルの現代化とは見なされず，伝統音楽のカテゴリーに分類される場合も多い。

3.5 演劇とサムルノリを融合させた「ナンタ」

ナンタはノンバーバル（非言語的）パフォーマンスというジャンルに属する音楽劇作品で上演には 90 分程度の時間を要する。現代的ホテルの厨房を舞台とし，厨房器具を打楽器に見立てて演奏される伝統音楽のリズムと，ナンタのために作曲され事前に録音された音楽が，作品構成上の重要な役割を担う(このような，音源の見えない音を本論では一括して BGM[58]と呼ぶことにする)。このシンセサイザーを主体としたドラムやギターなどを含む現代のバンドの楽器構成によるダンス・ミュージック風の BGM は，単独に用いられることもあるが，これに合わせて激しい動作を伴うダンスや厨房器具による伝統音楽の演奏が行われることの方が多い。ナンタは音楽劇ではあるが，音楽だけではなく照明や舞台美術などの視覚的要素や，観客参加などにみられる演劇的手法なども重要な役割を担う総合芸術である。ナンタの創始者であるソン・スンファン(宋承桓, 1957～)は，ナンタを着想した経緯について，以下のように述べている[59]。

---

[57] サムルノリはプンムルでも用いられる韓国伝統打楽器のケンガリ（꽹과리），チン(징)，チャング(장구)，プク(북)ソゴ(소고)の打楽器の中でソゴ(소고)意外の４つの楽器で演奏される。サムルノリの演奏の際は，プンムルで着る長袖のチョゴリと呼ばれる上着を着，男子用の幅広のパジを履く。チョゴリの上に黒いチョッキを着用し，赤，青，黄色のひもを肩から腰に斜めにかけて腰で結ぶ。地域地域によってはチョッキの色が異なることも多い。

[58] BGM(Background music)は,本来は主体となるものの背景に流される音楽のことを言う。

[59] ソン・スンファン(宋承桓 송승환)はタレントであり,株式会社 PMC プロダクションの代表,ナンタの創始者である。ソン・スンファン（宋承桓)『世界を乱打した男文化 CEO 宋承桓』ブキアン，2003，pp.68 [原書名：송승환 『세계를 난타한 남자 문화 CEO 송승환』북키앙，2003，pp.68]

言語を使用しなくても最も韓国的なものとは一体何だろう。この質問を受けて，サムルノリという答えを出すことはそんなに難しいことではない。サムルノリは最も韓国的なリズムで構成されていて言語が介入する余地はない。それに加えて『キムドクス・サムルノリ』という文化団体が長い間海外での活動を続けてきたおかげで韓国文化の中では世界でもっともよく知られている。このことを踏まえてナンタの基本的なコンセプトが作られた。それは「サムルノリを利用した非言語劇を作る」ことだった。もちろん，これは最初から世界進出を前提として生まれたアイデアだった。（李敬美　訳）

現代的ホテルの厨房を舞台にするナンタはその物語に合わせることでケンガリ，チン，チャング，プクに見立てた厨房器具と伝統楽器を用いる（図 3-30）。ケンガリの音と近い音の演出のためには金属製の鍋やプライパン（図 3-31），プクに見立てるためにはプラスティック製のたらいなどを用いている（図 3-32）。プラスティック製のドラム缶に伝統楽器を入れるなどナンタの物語に合わせて制作した楽器を用いることもある（図 3-33）。またサムルノリの楽器に見立てた楽器以外にもお箸，金属製のボウルなど厨房にある様々な道具を用いて演奏している（図 3-34，図 3-35，図 3-36，図 3-37）。ナンタで用いられている厨房道具や伝統楽器は事前に舞台に設置されているか俳優が持って登場するなど，物語に合わせて選別された楽器がそれぞれ決まったエピソードで用いられている。このようにナンタでは伝統要素を抽出して，物語に合わせて配置して現代的ホテルの厨房に伝統楽器や伝統的要素が溶け込まれている設定となる。現代劇をみる観客は伝統の要素と現代的な要素が融合されたことを自然と感じることになる。

図 3-30　伝統打楽器であるチン。ナンタの物語が始まる前のプロローグでは伝統衣装を着て伝統打楽器を用いて演奏する。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

図 3-31　金属製楽器であるケンガリに見立てた音と近い音の演出でプライパンを利用している。安定的に演奏するためにプライパンは厨房の食器棚に固定されている。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

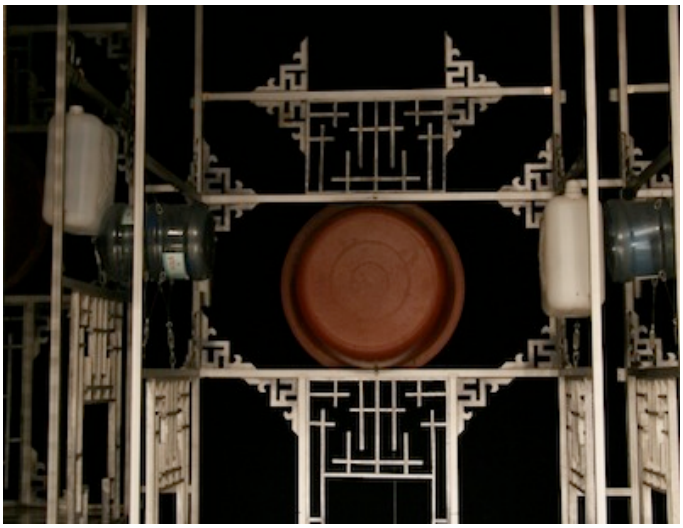

図 3-32　プクに見立てたプラスティックたらいを安定的に演奏出来るように事前に固定している。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

図 3-33　ナンタで使用されている楽器。伝統楽器を大きいプラスティック製のたらいの中に入れて厨房道具に見せかけている。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

図 3-34　ナンタで用いられている厨房道具。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

図 3-35　ナンタで用いられている厨房道具。（李敬美撮影　2010 年 8 月）

図 3-36　ナンタで用いられている厨房道具。（李敬美撮影　2010 年 5 月）

図 3-37　ナンタで用いられている厨房道具。（李敬美撮影　2010 年 5 月）